

第52回造本装幀コンクール

JAPAN BOOK DESIGN AWARDS 2018

受賞者インタビュー

『はな子のいる風景 イメージを(ひっ)くりかえす』

(吉祥寺美術館 刊)

松本 篤氏

AHA!／remo [NPO法人記録と表現とメディアのための組織]

大内 曜氏

(吉祥寺美術館学芸員 ※インタビュー当時)

—はじめに、お二人のご活動について、お聞かせください。

松本 「文房具としての映像」という考え方を軸にさまざまなワークショップやプログラムを企画しているremo [NPO法人記録と表現とメディアのための組織] という団体の運営に2003年から関わっています。2005年に、写真や8ミリフィルムといった「市井の人々の記録」に着目したアーカイブプロジェクト、AHA!をremoの事業の一環として始動させました。目下、国内各地の美術館や大学、生涯学習施設などと協働しながら、地域の記録と記憶を残す仕組みづくりに関わっています。

大内 私は美術館の学芸員として2013年に吉祥寺美術館に来ましたが(2018年9月末で退職)、関心としては、いわゆる「美術」の王道というより、美術品と資料、すなわち「アーカイブ」というものに興味があり、例えば「図書」として保存されるものもそうですが、資料として保存されるもの・記録物と美術品と価値づけられるものの差について考えたいという意識があり、美術館という場で記録物を使った展覧会というものを企画してきました。

「記録」というテーマが自分の中にできあがってきた頃に、松本さんが大阪を拠点に日本の各地でアーカイブプロジェクトを展開されていることを知りました。松本さんには、『はな子のいる風景』の企画以前に、参加者にカメラを持ってもらい、吉祥寺の町に出て映像作品を作るワークショップや、武蔵野市民から8ミリフィルムを集めるアーカイブプロジェクトを実施していただきました。そのような吉祥寺周辺での活動の中で、「はな子」という存在に出会い、松本さんからはな子を媒体にした記録集を作りたいという提案をいただき、2017年夏に開催した企画展の中のプロジェクとして進めていくことになりました。

—今回の作品制作にはどのように関わりましたか？また、受賞されたことについてのお二人の反応はいかがでしたか？

松本 デザインを担当してもらった尾中さん、提供者とのやりとり

東京都知事賞

『はな子のいる風景 イメージを(ひっ)くりかえす』

出版社／武蔵野市立吉祥寺美術館
装幀者／尾中俊介 (Calamari Inc.)
印刷会社／大村印刷(株)
製本会社／大村印刷(株)
貼込・差込／
(社)武蔵野ワークセンターけやき



を一手に引き受けてもらった大内さん、企画・編集を担った松本の3人体制での制作は、非常に濃密でした。一冊の本をめぐって、編集とデザインの立場が入れ替わったり、それぞれの立場をこえた議論が自然なかたちで生まれるなど、とても刺激的な1年間でした。その結果、評価していただけたことは率直にすごくうれしいです。あらためて、はな子という存在の大きさを感じましたし、写真を提供していただいた方々に対しても、とても感謝しています。実質的な制作期間は約1年間でしたが、本当の制作期間は70年なのではないかと思っています。タイで生まれたのはな子が日本にやってきて、そのはな子前で写真が撮られて、はな子が69年の生涯を閉じて、それから1年かけて本をつくった。『はな子のいる風景』は、70年という時間の厚みが結実させた壮大なプロジェクトなのだと思います。はな子という存在によって生まれた記録が、さまざまな人の思い出の一枚になっていたこと。そしてそれらが1冊の本に収斂していったということ。そんな凄まじさを、審査員にも感じていただけたのではないのでしょうか。

大内 デザイナーの尾中さんも感じられてきたと思うのですが、この本って評価されにくいというか。美術館で展示し、見せるものとして最初に作りましたが、これをアート作品としてみてほしいわけでもなく、しかし一方でそのような見方もできるし、本としたら写真集なのか、あるいは民俗学・生活史という側面で見るとかというようにいろんな要素が生まれ、既存のジャンルにとらわれずに、それを超えていくような内容のものができたんだなと思いました。でも、そのような多様な側面を持つが故に、既存の評価の枠組みにあてはまりにくいのではないかという感覚も持っていたので、今回造本装幀コンクールで目をとめていただき、評価していただけたのはすごくうれしかったです。

松本 『はな子のいる風景』は、はな子に焦点をあてた時系列の写真集と、提供者に焦点をあてた反・時系列のアンケート集の二部構成になっています。実はこの構成は、本をつくるプロセ

スそのものでもありました。

2015年の秋頃に実験的にはな子の写真を集め始めたのですが、その時は、はな子というメディアを通していろんな人に焦点をあてるというコンセプトを持っていました。

しかし、プロジェクトはひっくり返ります。写真を本格的に集めはじめようとした矢先に、はな子が死んでしまうのです。いろんな人々を結ぶ「結節点」としてのはな子が、「消失点」になってしまった。そこで二つ目のコンセプトが立ち上がります。いろんな人をメディアとして、はな子に焦点をあてるというものです。つまり、いろんな人が撮った写真をもちよってもらって、はな子の69年の生涯を悼むというコンセプトです。つまり『はな子』は、ダブルコンセプトになっていて、それをブックデザインに落とし込む必要があったということです。

この本を、イメージを「くりかえす」ものでもあり、イメージを「ひっくりかえす」でもあるようにつくる。この本のダブルコンセプトを、

(ひっ) という二文字が支えているんです。第一部の写真集の最後のページまで行くと、第二部のアンケート集が現れます。アンケート集は時系列が逆になっている。つまり、この本は二回編集されたものです。まず時系列に編集をしてから、時間を逆さにして編集し直す。異なる二つの論理が並行しているわけです。それは写真の構図とも共鳴しています。写真は、はな子の手前に人がいて、後ろにはな子がいて、一緒に写っているように見えているけど、実はその間には、人と象を分けるための溝がある。常に隔たりが横たわっている。その溝の向こう側のはな子を中心にした第一部。そして今度は溝のこちら側の人を中心にした第二部。隔たりを行ったり来たりするような構成になっています。

プロジェクト自体の経たプロセスと本の構成を一致させていく。写真の構図と本の構成を一致させていく。つまり、内容と形式をいかに一致させていくか、編集と造本をいかに一致させていくか。くりかえしたり、ひっくり返したりすることがフィジカルにも、内容自体にも起こるようなあり方を追求することで、本に強度が生まれてくる。

なぜ本に強度を持たせるかというと、はな子に会ったことのない読者が、写真を提供していないにも拘らず、あたかも本の中に自分がいるという実感を受け取ってもらいたかったからです。制作中のほとんどを費やした尾中さんとの対話は、いかに編集と造本を連動させることによって強度を出すか、ということでした。

大内 私も定期的に松本さんたちに進捗状況をうかがいながら意見交換をさせていただくということがありました。その中で私の立場としては写真を提供してくれた方と電話や対面で直接お話をするという機会が多く、写真も550枚くらいありますが、ほとんどの方が写真にお手紙を添えて送ってくださっていて、提供者



右：大内氏
左：松本氏

のはな子に対する「思い」を一番最初に受け取らせていただくという立場にいました。

この本のコンセプトとしては失われていく記録であったり、記憶をどう集めてとどめていくことができるのかということであり、いわば市井の人々がどう戦後を歩んできたのかという生活のあり様をはな子を通して人々の生活を照らしていくということが考えられていました。その中ではな子が亡くなるという出来事が起こり、それを機に「はな子ありがとう」という感謝や惜別の気持ちで写真を提供してくださる方が多くいらっしゃいました。しかし、もともとのコンセプトとして「はな子ありがとう」のような追悼本ではないという思いは制作者の二人には強くあり、だからこそ写真を全部貼り付けるという形や全部モノクロの写真にするという造本の工夫などは、亡くなったはな子を追悼しようという提供の方々の方々の気持ちと、本来完全に一致するものではありません。

しかし、私の立場としては、提供してくれた方々が置いてけぼりにならないように、私たちが写真を募集する際に無意識的に「はな子の写真集」のようなものを期待させている部分もあったという思いも自分の中にあり、そういったところも考慮してほしいという気持ちがあって、そのことは少しお願いをする部分がありました。そういう気持ちは尾中さんたちも持っていたので、「はな子ありがとう」という気持ちにも寄り添っているし、もちろんはな子のことも大事にしているし、提供者の方や読者の方の記憶が刺激され、みんなの気持ちが大事にされるようなデザインになったのではないかと考えています。

松本 提供者を置き去りにしてはいけないという気持ちと、はな子のことを知らない人にも響くようにしたいことをどう両立させるかといったことをよく考えました。それは、どうやったら提供者にも驚いてもらえるかということでもあります。例えば、写真と日記を並置させるという方法は、そこから出てきたアイデアと言ってもいいかもしれません。提供者自身が提供した写真なのに、撮影日に記された日記を並置することで全く違う意味が生まれてきます。

このページの見開きですが、二枚の写真はそれぞれ別の方からご提供いただきました。はな子を結節点として、同じ日の同じ

時刻にいたふた組の人たち。この本が完成した後に片方の提供者の方に見ていただいたんですが、すごく驚かれていました。

別のパターンもあります。

——この集合写真に写っている子供たちは、同じ子供たちですか？

松本 同じ写真なんですよ(笑)

——提供者が別々ってということですか？

松本 当時のクラスメイトの、それぞれ保管していた集合写真が別々に提供されたんです。写真が複製できることがこの状況を成立させています。しかし同時に、複製できるからこそ色の褪せ方が異なっているように、写真の唯一性が顔を出してきます。

——同じ場所と時間に別々の人が撮った写真だということは、審査の過程でも気づかなかったと思います(笑)



松本 最近、古いモノクロ写真をカラー化するような技術が目ざれたりしています。『はな子』はそのような情報工学的な技術を用いず、人間の想像力や認識力が最大限に発揮されるように作りました。実際には色が付いてないのに付いているように錯覚してしまう、ということです。例えば、モノクロ写真に、飼育日誌や提供者のアンケートを並置することで、色が見えてくるように感じられるような仕掛けがあちこちに散りばめられています。つまり、錯覚が発動するためのトリガーとして、造本や装幀がとても重要だと考えていたんです。もっとも歴史の長いテクノロジーとしての本だからこそ、デジタル技術ではなく、アナログでできることを尾中さんと模索しました。

——デジタルが発展する中で、アナログとしての本の可能性、アーカイブをフィジカルに残していくことの意味は？

松本 直接経験していないにも拘らず、そこに自分がいる、経験したような実感を受け取るという感覚は、現代社会においてとても重要な感性のひとつです。そのセンスを磨くひとつの方法が、本を読むという行為だと思います。なぜなら、ページをめくるという動作は、受動的でありながら、自分と本を作っているきわめて創造的な行為、能動的な行為だからです。

本は人間の知覚に最適化されたメディアです。本自体は変わらないけど、読むたびに、その時々自分の感覚によって異なる

印象を受けることもある。そんなところに、アナログのメディアの価値があるのかなと思っています。

大内 アーカイブの話になると、難しいのですが…(笑) 物質として残していくことの大切さはあることを前提としてあると思いますが、「残すこと」の中での、何を残すのかという取捨選択とか、全部残せるのか、選別した結果に残した際の基準は正しかったのかとか、「残す」ということだけを全面的に肯定できないと思う部分もあります。

この本について言えば、新しい技術というようなものの上に乗っかっていかないというか、非常に限られた予算の中で、尾中さんたちのアイデアによって、手触りの良さだったりとか、本の開きの良さや扱いやすさ、手の中で扱いやすく、見やすい本にしておくこと、そういったことが手作業の積み重ねによって生み出されるような感覚を抱ける造本が実現されているように思っています。この作品がきちんと人の手に収まり、呼吸や触感などを駆使しながら読んでいく中で、松本さんがコンセプトにしている、人の想像力を使って新しい記憶を生み出すこと、残していくことを、モノとしてだけでなく、そのモノと受け手である人間が一体化して、イメージネーションを膨らますという中で新たな記憶を残すことの在り方についても考えさせられます。また、ものを残すだけではなくて、人が参加することによって記憶が膨らむところに残っていく「アーカイブ」の可能性をさらに広げてくれるような本だと思います。そういった側面をこれからさらに追及していったら何か提示できたらいいなと思っています。この本をきっかけにさらにその想いが強くなったかと思っています。

松本 そうですね。今回のことと言えばアーカイブってところもひっくり返っている。アーカイブって完全無比にすべて残していくって発想が強いと思うんですけど、その別の側面としての造本への関心は逆に高まっているかもしれませんね。デジタルに対してどうインパクトのあるものを作るのかということについて意識が高まっていく機運になっていくと思います。

大内 アーティストの中でも本を作って展示しようという方も増えていますし。

松本 実は、この本の中の写真の貼り付けや差し込みは、社会福祉法人武蔵野の「ワークセンターけやき」という作業所に依頼しました。製本の最後のパートでもあるため、「本が出来上がっていく」感覚を感じてもらえたようでした。作業していただいた方たちの多くは地元の方々だったため、作業を通してはな子との記憶を反芻していたと職員の方から伺いました。今回のように、写真の提供者をはじめとして、さまざまな方々に関わっていただきながら一冊の本を作り上げていくことができたのは、私にとってとても幸せな時間でした。(了)